

社説

市民が高める医療の質

名前を隠されて診察室に入る。100人へ診察を待たせられたらどうか？。診察を待たせていた患者の不安と緊張感が、医師の発する最初の言葉から伝わりだす。臨床医としての医療面接(問診)は昔も今も、診断に必要な情報を得るための最も基礎的で優れた方法である。

しかし、医療サービスの内容が多様化し、専門的で高度になるにつれて、適切な医療が施されたかどうかをめぐるトラブルも増加の一途だ。

そのほとんども、医師と患者間の意思伝達がうまくいってこられは起らないに済んだらいい。

こうしたことを背景にして一九九七年の舊れに医療法が改正され、インフォームドコンセント(十分な説明に基づく同意)に努力する義務が医師に対して課せられた。

これを受けて医学界では最近、医療面接に習熟した医師を社会に送り出すことに取り組んでいる。教育現場では既に、医療面接を含む「客観的臨床能

力評価試験」(OCC)を学生に課す医科大が増えている。厚生省の医療関係者評議会医師部会昨春まとめた医国医会試験の見直しについての報告書でも、OCCなどの実技試験を、ゆくゆくは必ず導入するとの二つに挙げている。

模擬患者の会

時だけに初れる非日常的な場であり、向かい向者は微妙な緊張関係におかれるからだ。

いろんな患者の役を演じてくれる人が外部から来てくれて、しかも習熟度を採点したり、改善した方がいい点について率直な意見を語ったりしてくれる理想の世界である。

医師候補生の研修の場などでその役

割を積極的に果たしようとしているボランティアグループが、(C)コミュニティー・ベンチヤン(模擬患者)研究会だ。

九五年に発足した東京の研究会を草分けとして、関西には大阪の研究会があり、九州地域では昨年四月から九州山口の研究会黒岩かを代表者が活動している。

患者を取り違えて手術するのを深刻な医療過誤事件も起き、医療不信が深まっている中で、医療の質を高めるのに貢献しようとして努めている。研究会の能動的な姿勢は高く評価される。会員たちは、臨床医の面接技術向上に役立ただけだ、いいと思っているのではない。医療提供者に自分の命と健康を無条件にゆだねることの多かったこれまでとは異なる新しい医療観を、市民も主体的に構築していかなければ、という明けた考え方に立っているのである。

医療サービスの消費者としての自覚を高めていく中で、医療者の意識改革を促す。医療をより人間的なものにする作業に正しく立ちかかわる新しいかたちが、そこにあろう。

研究会へのご意見やお問い合わせ 医療面接学会へのお申し込みは 下記まで

九州山口SP研究会 代表(コミュニケーション薫陶塾 主宰) 黒岩かをる

オフィス: 〒810-0024 福岡市中央区桜坂1-11-29

TEL&FAX: 092-741-1805 E-mail: doublek@bd.mbn.or.jp